

万葉集291番歌の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the 291st Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集291番歌「真木の葉の しなふ勢能山 しのはずて 我が越え行けば 木の葉知りけむ」は原文の訓読についてはすでに確定しているが、歌の解釈にいくつか問題を残している。最も大きな問題は結句の「木の葉知る」が「木の葉が人間の心を知る」という意味に解され通説となっていることである。現在でも樹齢数百年あるいは数千年の大木に神が宿るとして注連縄などを廻らし信仰の対象とされているが、これはあくまでも木の「本体」に対するものであり、木の「葉」が人間の心を知るなど常識的にとっても信じ難い。奈良時代の人々はこんな俗信を共有していたのだろうか。

本論文は結論として次のような解釈を提案する。「しのみ」という上代語には「(目の前にないものを)あれこれ考えて思ふ」という意味があるから、この歌の第三句の「しのはずて」を「(山道の行き方に関して)あれこれ考えずに」の意に解し、また「しのはずて」には「しにはづて=死に葉づて」(落ち葉伝いに)の意が掛けられていると見なし、結句の「木の葉知る」を「木の葉(落ち葉)が山道の行き方を知っている」という意味に解する。このように解釈すると、291番歌をごく常識的な内容の歌として理解することができる。すなわち、深い山道に行く場合、何も考えずに人に踏まれた落ち葉の跡さえ伝って行けば正しく目的地にたどり着ける、という内容として。

1. はじめに

万葉集291番歌は巻三の「雑歌」に分類された歌の一つである。まず歌の内容(訓読文と原文)を新日本古典文学大系本に従って掲載する [1]。

小田事の勢能山の歌一首

03/0291 真木の葉の しなふ勢能山 しのはずて 我が越え行けば 木の葉知りけむ

【原文】真木葉乃 之奈布勢能山 之努波受而 吾超去者 木葉知家武

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

ここの題詞に見える小田事はこの歌の作者であるが詳細は不明である。势能山は和歌山県伊都郡かつらぎ町にある標高167.6mの山である。国道42号線沿いの道の駅「紀の川万葉の里」の土手から撮影した背ノ山を下図に示す。紀ノ川をはさんで対岸（南側）には妹山（121.4m）がある。



次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている現代語訳と注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。訓読文は上に示したものと異なる場合だけ掲載した。また、記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

①新日本古典文学大系^[1]

【現代語訳】真木の葉の撓（たわ）みしなう势能山を、愛でるゆとりもなく私は越えて行くが、私の心は木の葉が知ってくれたであろう。

【注釈】「真木」は木の美称。杉・檜などを言う。「しなふ势能山しのはずて」と、頭韻を踏む。草木が人の心を理解するという歌、「天雲のたなびく山の隠りたるあが下心木の葉知るらむ」（一三〇四）。

②新編日本古典文学全集^[2]

【現代語訳】真木の枝葉が たわみ茂っている势能山を 眺めるゆとりもなく 越えて行くが 木の葉もわたしの気持ちを分ってくれたろう

【注釈】しなふ——自らの重みで木の枝などがたわみ垂れること。○しのはず手——賞味愛玩しない。公用などの旅でせっかくの佳景もゆっくり見られなかったことをいうか。○木の葉知りけむ——木に宿る精霊の存在を信じての表現であろう。

③講談社文庫（中西進）^[3]

【訓読文】真木の葉の しなふ勢の山 ^し忍はずて わが越えゆけば 木の葉知りけむ

【現代語訳】真木の葉も萎（しな）えて背の山よ。私も心しなえて堪え難く越えてゆくので、木の葉もわかったのだろうか。

【注釈】小田事——諸本「小田事」とあるが、この歌を「古今六帖」に小田事主の作と伝える。言主の意で、敬して主をそえることもあったか。○しなふ——「しなゆ」と同じ。○勢能山——35番歌を参照。○しのふ——堪える。四段と下二段とある。○努——原文第三句「努」は底本原文「奴」。類らによる。○葉のしなえをわが心への同意かとした即興歌。

④万葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【訓読文】真木の葉の しなふ勢の山 しのばずて 吾が越えゆけば 木の葉知りけむ

【現代語訳】真木の葉のしなやかに垂れてゐる勢の山を、家郷を思ふ心を忍びかねて、自分が越えて行くと、その山の木葉も自分の思ひを知つた事であらう。

【注釈】真木の葉のしなふ勢の山——真木は既出（一・四五）。「しなふ」は「春山之 四名比盛而」（十三・三二三四）、「秋芽子之 四搓二将有 妹之光儀乎」（十・二二八四）、「多知之奈布 伎美我須我多乎 和須礼受波」（廿・四四四一）などの例によつて察せられるやうに、しなやかな様子をしてゐること。檜や榎などの枝葉のしなやかに靡いてゐる勢の山、の意。

しのばずて吾が越えゆけば——「努」の字、亍（二・五ウ）、西、無、附など「奴」とあるが、類、紀、矢、京によつた。玉の小琴に「勢の山をめで偲びて、暫くは立も止るべきに、さもあらで只に越行けば、真木の葉も知ぬらむ、夫をうきことに思ひて、しなぶれてあるよとよめる也」と、「しのぶ」を「黄葉をば 取りてぞしのふ」（一・十六）の「偲ぶ」意と同じにしてゐるのは従ひ難い。「しなふ」も「しなゆ」（二・一三一）と混同されてゐる。既に代匠記に「故郷ヲ恋ル心ニエタヘシノバデ越行ハ」とあるによるべきである。「偲ぶ」の意の「しのぶ」は四段活用であり、「忍ぶ」の意の「しのぶ」は「志乃備加祢都母」（十七・三九四〇）の例もあつて、上二段活用のやうであるが、四段も行はれてゐたと思われ、ここは四段の「忍ぶ」の例である。

しのばむにしのばれぬべき恋ならばつらきにつけてやみもしなまし（拾遺集卷十五）

など後世も四段の例がある（古径三『偲ぶ』と『忍ぶ』参照）。「しなふ」と「しのぶ」と類似音をくりかへしたので、

吾妹児乎 聞都賀野辺能 靡合歛木 吾者隠不得 間無念者（十一・二七五二）

も同様のくりかへしによつて上三句を序としたものであるが、またそれと較べて今の「しのぶ」の意も察することが出来る。

木の葉知りけむ——勢の山の真木の木の葉も自分の心を知つた事であらうといふのである。

【考】「しなふ」と「しのぶ」と類音を重ねたこと訓釈の条で同様の例歌をあげて述べた如くであり、この「しなふ」を「しなゆ」とか「うらぶれ立てり」（七・一一一九）とかと同じやうに考へて、木の葉も自分と同じやうに萎れてゐると見る玉の小琴などの説は当たらない。講義に「この勢能山をわが今超えむとて通れば、この山には真木の葉が勢盛んに、若々しくしなやかなる姿にて茂りあへるを見る。われはこの若々しくしなやかなる姿を見て、わが思ふ人の姿を連想し忍びかねて、ここを通るが、この榎の木葉は吾が心をば知りたるならむ。さやうに思ひて見れば、ますます故郷に残れる人のしなやかなる姿が、この木の葉によりて思ひ出さるゝよとなり。」とあるので、意を盡してゐる。

⑤日本古典文学大系^[5]

【訓読文】真木の葉の しなふ勢の山 賞はずて 我が越えぬるは 木の葉知りけむ

【現代語訳】真木の葉のこんもりと繁った勢の山をゆっくり賞美せず私に越えてしまった気持ちは、木の葉が分つてくれたことであらう。

【注釈】真木——杉・檜（ひのき）・松など。○しなふ——こんもりと繁る。ふっくりと曲線美を示す。春の山、秋萩、藤の花房、美しい人の姿などにいう。シナユとは別語。○勢の山——一五九頁注四。○賞はずて——賞美せずのにの意。官命の旅などのためか、ゆっくり賞美している暇が無いのである。耐えずしての意に解するは誤。賞美する意はシノフでハ行四段活用。語幹のノが甲類 no 忍耐する意はシノブで上二段活用。語幹のノが乙類 nō ここでは前者。

次の第2節では上に示した五つの先行研究の問題点について検討し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

前節に示した五つの先行研究の結果にはいくつか問題点がある。第一に、①から⑤のすべてが結句の「木の葉知る」を「木の葉が人間の心を知る」の意に解していることである。歌全体の解釈はすべてこれとつじつまが合うように行われている。ところが、「木の葉が人間の心を知る」という解釈は、いくら古代人が俗信深いとは言えとても受け入れ難い。もし「人間の心を知る」のが木の「葉」ではなく「木の本体」というのであれば、受け入れることができる。というのは、私たちの先祖は記紀に見るように八百万の神々を信仰してきたが、現代でもなお古い神社の境内などに樹齢数百年から数千年の木（クスヤスギなど）に注連縄を廻らし「神木」として信仰の対象にしているのをしばしば見かけるからである。しかし、木の「葉」が「人間の心を知る」ということになれば話は別である。なぜ「葉」でなければならないのかまったく理解できないばかりか、上代の文献はもとよりそれ以降の文献や伝承にも例がない（すべてを確認したわけではないけれど）。しかも、このような俗信が歌になり万葉集に収録されているという事実は、この俗信が単なるローカルなものにとどまらず日本列島全体の人々に「共有」されていたと考えなければならない。もしこれが事実だとすれば、このような俗信の痕跡が文献や民族風習などに多少なりとも残っていてよさそうである。しかし実際にはそのような痕跡はない。

このような根本的な問題があるにもかかわらず、これまでほとんどすべての万葉学者たちが「木の葉が人間の心を知る」という解釈を「安心して」受け入れてきたのは、万葉集に次の歌があるからである。以下に、この歌の訓読文、原文、大意、注釈を新日本古典文学大系本によって示す〔6〕。

07/1304 天雲の たなびく山の ^{こも}隠りたる ^あ我が下心 木の葉知るらむ

(原文) 天雲 棚引山 隠在 吾下心 木葉知

(大意) 天雲のたなびく山のように包み隠した私の心の中は木の葉だけが知っているだろう。

(注釈) 第四句の原文、西本願寺本「吾忘」。略解所引宣長説に、「忘は下心二字の誤りて一字に成りたるなり」。この説に拠る。「木の葉」は恋人の譬え。木の葉が人の心を知る例として、「真木の葉のしなふ勢能山しのはずて我が越え行けば木の葉知りけむ」（二九一）ともあった。

ところが、この解釈はもともと原文の第四句に「吾忘」とあるのを、本居宣長の説に従って「吾忘」の「忘」を「下心」の誤字として「原文改定」した上でなされたものである。もし第四句が原文どおり「吾は忘るとも」と訓んで意味が通じるならば、これまでに行われてきた291番歌の解釈はすべてその根底から崩れ去ってしまう。実際、そのような訓みと解釈が可能であることを次節で示す。

そのほかの問題点として、第二句の「しなふ」と第三句の「しのはずて」の解釈に関する問題がある。

まず「しなふ」については、①、②、④、⑤は「たわんで茂っている」の意に解するが、③は「萎えている」と解している。しかし、④と⑤の注釈にも指摘されているように「萎える」の意味の語は下二段活用の「しなゆ」であり（〔7〕、p.361）、もし第二句が「萎えている勢の山」の意であるならば歌の第二句は「しなふ勢の山」ではなく「しなゆる勢の山」となっていなければならない。③は「しなふ」と訓みながら脚注に、「しなゆ」と同じ、とコメントして「萎えている」の意に解しているが、「しなやかにたわむほど茂っている」という「しなふ」に「萎えている」という逆の意味があるとは思えない。したがって、第二句の「しなふ」については多数派の解釈「（しなやかに）たわんで茂っている」が正しいと見てよいだろう。

次に第三句の「しのはずて」の「しのふ」の解釈であるが、①と②と⑤は「賞美する」の意に解している。一方、③は「耐え忍ぶ」の意味に解し、④は「しのぶ」と語尾を濁音に訓んだ上で「耐え忍ぶ」の意に解している。以上のほかにも、「もの思いする」（作者が明るい気持ちで旅行していることを語る）と解するものなどがある〔8〕。

以上が先行研究に関する主な問題点であるが、全体的な問題点として、結句の「木の葉知る」を「木の葉が人間の心を知る」の意に解する限り、歌には含まれない内容を恣意的に補足してやらないと歌の意味が把握できなくなるのが難点である。例えば、②は「しのはずて」の頭注に「公用などの旅でせっかくの佳景もゆっくり見られなかったことをいうか」と補足し、「木の葉知りけむ」に「木に宿る精霊の存在を信じての表現であろう」と補足している。③はこの歌を「葉のしなえをわが心への同意かとした即興歌」と解している。④の注釈に引用された本居宣長の玉の小琴は、木の「葉」が感情をもち、下を通り過ぎていく人間が立ち止まって自分（木の葉）を觀賞してくれないのを不満に思って「うらぶれている」と解釈している。また④の【考】に引用された山田孝雄氏は「山道を通る作者が、周りの木の葉の勢盛んで若々しくしなやかな姿を見て、恋人を連想し忍び難い気持ちになるが、この気持ちを周りの木の葉も知っていると思うと、ますます故郷に残っている恋人のしなやかな姿がこの木の葉から思い出される」と解釈しており、澤瀉氏もこれでこの歌の意がほぼ尽くされているとしている。しかし、上にあげたような補足的な解釈はすべて注釈者たちの「文学的な解釈」にすぎない。歌自体にはそのような内容は含まれていないし、歌の分類も「雑歌」であって「比喩歌」ではない。もっと常識的に理解されるべきであろう。

以上見てきたように、先行研究の解釈はすべて「木の葉が人間の心を知る」という常識とはかけ離れた前提をもとに文学的に解釈が行われている点に疑問があり再検討の余地がある。また第二句の「しなふ」は多数派に従って「（しなやかに）たわんで茂っている」の意に解してよいと思われるが、第四句「しのはずて」については注釈書により解釈が分かれており、未だ問題を残している。

3. 万葉集291番歌の新しい解釈

この節では、まず新しい解釈の結果を示し、その後に解釈の根拠を個別に示していくことにしよう。まず291番歌の直訳と意識を示す。

03/0291 真木の葉の しなふ勢能山 しのはずて 我が越え行けば 木の葉知りけむ

（直訳）真木の葉が生い茂っている勢の山を、（山道の行き方に関して）あれこれ深く考えずに（ただ人の踏んだ落ち葉の跡を辿って）、私が（正しく）越えて行く（ことができる）ので、（山道の行き方は「あらかじめ」）木の葉が知っていたのだろう。

（意識）勢の山は深く生い茂った真木の葉に覆われている。そんな山の中を越えて行く際に、前回この

山を越えた時はどこをどう通って行ったのだろうか、この先どこをどう曲がればよいのだろうか、などとあれこれ考えたりせずに、ただ下に落ちている落ち葉の様子だけに気を配り、人に踏まれた落ち葉の跡を辿りながら進んで行くと、何とか迷子にならずに目的地にたどり着くことができる。ということは、通るべき正しい道は「あらかじめ」「木の葉＝落ち葉」が知っていたことになるだろう。

このような解釈であれば、「木の葉が人間の心を知る」という俗信の存在を前提にしなくても、現代人の私たちの常識の範囲内で理解することができる。山道の歩き方は昔も今も変わらず、人に踏まれた落ち葉の跡を頼りに歩くのは今でも常識だからである。

以上の解釈に関連して、一つ重要なポイントを指摘しておきたい。それは第二句の「しなふ」という語がこの歌の中で如何に重要な役割を果たしているかという点である。この歌の「しなふ」は「木の葉が深く生い茂る」ことを表しているが、この語のもつ意味を考えるために、仮に勢の山が「はげ山」だったと仮定してみよう。あるいは「はげ山」でなくとも、人間の腰の高さ以下の草木しか生えていない山だったと仮定してみよう。もし越えて行くべき山がこのような山だったとすると、人は歩きながら周りの景色や遠くの山々を見ながら自分のいる位置と進むべき方角を常に確認することができ、「落ち葉」がなくとも迷うことなく山を越えて行くことができる。ところが、越えて行くべき山が高い木々で覆われ、しかもその木の葉が生い茂っているため遠くの視界が完全に遮られた状況では、人が通った跡の目印となる「落ち葉」だけが頼りとなる。したがって、この歌の結句の「木の葉知りけむ」という表現が生きるためには「しなふ」という語は欠かせないのである。

さて、先に示した本論文の解釈について個別の検証をしていくことにしよう。まず「しなふ」を「(木の葉などが) 深く生い茂る」と解することができる根拠を示そう。「しなふ」については『時代別国語大辞典上代編』に「①草木などが茂ってたわみ靡く、②容姿のしなやかなさまを草木にたとえていう」の二つの意味があげられ多くの例が示されている。以下に一つだけ例を示す。

13/3234 ... 春山の しなひ榮えて (四名比盛而) 秋山の 色なつかしき...

次に第三句の「しのはずて」の解釈に移ろう。文法構成は「しのは+ず+て」と分解することができ、「しのは」は「しのふ」の未然形、「ず」は打消助動詞「ず」の連用形、「て」は接続助詞である。「しのふ」の意味については『時代別国語大辞典上代編』に次のようにある ([7], pp. 362-363)。

①慕う。偲ぶ。何かの縁にふれて身近にないもののことに思いをはせる。②賞美する。

万葉集における「しのふ」の用例は約100件弱あるが、そのほとんどは男女の恋愛で「相手を偲ぶ」の意に用いられている。しかし、数はきわめて少ないが次のような例がある ([1], p. 51)。

01/0054 巨勢山の つらつら椿 つらつらに 見つつ偲はな (見乍思奈) 巨勢の春野を
(大意) 巨勢山のつらつら椿、つらつらに見ながら偲ぼうよ、巨勢の春の野を

この歌の「しのふ」が上の①の意味に該当し「何かの縁にふれて身近にないもののことに思いをはせる」という意味であることは明らかである。この歌の例を参考にすると、今問題になっている291番歌の「しのふ」は「山道を歩きながら行く先々の道についてあれこれと思いをはせる」という意味に解することが

できるだろう。

なお、「しのはずて」には「山道の行き方についてあれこれ考えずに」という表向きの意味だけでなく、「しにはづて＝死に葉づて」（落ち葉伝いに）という意味が掛けられている。「しのはずて」に「しにはづて」が掛かるのは類音による連想からである。この結果、第三句と第四句の「しのはずて我が越えゆけば」は「行く先々の道のことを考えずに私が越えて行くと」という表向きの意味に、「死に葉（落ち葉）伝いに私が越えて行くと」という裏の意味が重ねられていることになる。

ところで、第三句の原文は底本（西本願寺本）では「之奴波受而（しぬはずて）」となっているが、最近の注釈書はすべて第三字目の「奴（ぬ）」を「努（の）」に原文改定して「しのはずて」と訓んでいる。このほかにも、底本原文の「しぬふ」を「しのふ」と訓み替えるためにわざわざ「奴」を「努」や「怒」に原文改定している例が六つも存在する（131、3992、4119、4147、4195番歌）。このようなやり方は大いに問題であろう。というのは、「偲ぶ」という意味の語が「しのふ」ではなく「しぬふ」とも訓まれたことは次の二つの「確例」が証言しているからである。

05/0802 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲^{しぬ}はゆ（麻斯提斯農波由） いづくより 来たりしものぞ まなかひに もとなかかりて 安眠^{やすみ}しなさぬ
20/4405 わが妹子が 偲^{しぬ}ひにせよと（志濃比尔西餘等） 付けし紐 糸になるとも 我は解かじとよ

したがって、わざわざ原文改定をして「しぬふ」を「しのふ」と訓み変える必要はまったくなく、「偲ぶ」を意味する語は上代には「しのふ」とも「しぬふ」とも訓まれていた、とすればよいだけの話である。今の219番歌も底本の原文どおりに訓めば「しぬはずて」となる。もちろん、このように訓んだからといって意味が変わるわけではないけれども、こちらの方がこの句に掛けられたもう一つの意味を連想しやすくなる。「しぬは＝死ぬ葉」はただちに「落ち葉」を連想させるからである。ちなみに、「ず」と「づ」は本来異なる音であるが、類音による連想が十分可能な近い音である（両音は江戸時代初期以降には区別がなくなり今日に至っている）。したがって、219番歌の第三句「しぬはずて」から期待される連想は「しぬはずて」→「死ぬ葉ずて」→「死に葉づて」となるだろう。なお、ここの「つて」は「伝える」を意味する動詞「つつ」（〔7〕、p.469）の連用形「つて」が名詞化されたものである。動詞の例だが「神代より言ひつて来らく」（894番歌）などの例がある。

最後に、通説が「木の葉が人間の心を知る」という俗信の根拠にしてきた1304番歌について検討しよう。第2節でも述べたように、通説はこの歌の第四句の原文を「吾下心」と改定して「我が下心」と訓んでいるが、本来の原文は「吾忘」であり、そのまま訓んで解釈すると次のようになる。

07/1304 天雲の たなびく山の 隠^{こもり}りたる 我は忘^{わす}れとも 木の葉知るらむ
（原文）天雲 棚引山 隠在 吾忘 木葉知
（大意）天雲のたなびく山がこんもりと生い茂っている。（そんな山の中を越えて行かなければならないが）私が山道の行き方を忘^{わす}れても、「木の葉＝落ち葉」が行く道を知っているだろう。

このように解釈してみると、この歌の内容は先の291番歌とほぼ同じであることがわかる。第三句の「隠りたる」という表現は、山が木々とその枝葉によって深く覆われて、山道を越えていく人はこれらに完全に視界を遮られて通常の見方による方法では方向がまったくつかめない状況にあることを表している。そんな中でも人の踏んだ落ち葉の跡を辿って行けばちゃんと目的地にたどり着けるといっているのであろう。な

お、上の1304番歌は巻七の「譬喩歌」に属する歌で、柿本人麻呂歌集に収録された十五首のなかの一首である。なぜ譬喩歌なのかと言えば、「木の葉＝落ち葉」が道の行き方を知っていて人に教えてくれるという擬人化された内容が含まれているからである。

上の1304番歌は「三句切れ」になっているが、同じ柿本人麻呂歌集に属する十五首の中に似たような三句切れの1298番歌がある。また、1304番歌の第三句「吾忘」が「我は忘るとも」と訓める根拠として、同じく柿本人麻呂歌集の十五首の中に原文の「海荒」を「海は荒るとも」と訓む1309番歌の例がある。以下にこれらの例を示す。ただし、以下の訓み方は新編日本古典文学全集本によるもので、ほかに「海こそ荒るれ」、「海は荒るれど」などと訓む注釈書もある。

07/1298 かにかくに 人は言ふとも 織り継がむ 我が機物の 白き麻衣

07/1309 風吹きて 海は荒るとも (海荒) 明日と言はば 久しくあるべし 君がまにまに

4. おわりに

本論文では、万葉集291番歌の解釈について再検討を行い、特に結句の「木の葉知る」はこれまで長らく通説とされてきたような「木の葉が人間の心を知る」という意味ではなく、深い木々に覆われた山道に行く場合に落ち葉を伝って行けば目的地に着けるという意味であることを指摘した。また、従来から「木の葉が人間の心を知る」という解釈の根拠とされてきた1304番歌も新しく解釈し直された291番歌と同じ内容の歌として理解できることを示した。以上のような解釈が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「万葉集一」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp.214-215、1999年。
- [2] 「万葉集①」、新編日本古典文学全集、小学館、p.188、1994年。
- [3] 「万葉集原文付全訳注(一)」、中西進、講談社文庫、p.194、1978年。
- [4] 「万葉集注釋卷第三」、澤瀉久孝、中央公論社、pp.168-170、1958年。
- [5] 「万葉集一」、日本古典文学大系、岩波書店、p.161、1957年。
- [6] 「万葉集二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.168、2000年。
- [7] 「時代別国語大辞典上代編」、三省堂、2005年。
- [8] 「増訂万葉集全註釋四」、武田祐吉、角川書店、pp.124-126、1957年。